

# 社会の課題 当事者意識を

## 経営学部創設10周年 記念シンポジウム

### SDGsと中堅・中小企業



5氏が登壇して行われたパネルディスカッション

経営学部は、平成23年（令和5年）の創設から10周年を迎える。SDGsと中堅・中小企業をテーマに、昨年11月23日に、世田谷キャンパスの多目的ホールで「SDGsと中堅・中小企業」をテーマにした記念シンポジウムを開催した。大澤英雄理事長、佐藤圭一学長をはじめ、教職員や歴代の学部長らが列席する中、対面と遠隔で経営学部の学生が多数参加し、経営学部の成り立ちと存在意義を確かめ、分ち合う機会とした。

開会のあいさつで佐藤学長は、「国士館の黎明期に尽力した先人たちが唱えた、道徳と経済の合一の考えが経営学部の原点にある」と紹介し、「沢谷が共感した国士館建学の精神と経営哲学を基礎とし、世界で活躍できる人材を養成していきたい」と述べ、さらなる発展を誓った。

基調講演では、CSR（企業の社会的責任）に特化したコンサルティングを行うOSGのアジア日本代表の赤羽真紀子氏が、SDGsと真の背景と趣旨を解説し、講演者全員が登壇したパネルディスカッション

では、赤羽氏の「コアな議論が交わされた」との感想も、SDGsに取り組み意義や課題、今後の展望を中心に活発な議論が交わされた。赤羽氏は、「SDGsのほかに、循環型経済、エンカレッジ、まな言葉を耳にする」と語り、これらが目指すところ、誰が取り組むべきか、世の中をつくり、社会課題を全員で思案していくこと、環境問題や社会問題に対する、個人が当事者意識をもつ重要性を説いた。続いて、伸和コンロールズ株式会社代表取締役社長、山本拓司氏、石坂産業株式会社専務取締役、右坂知子氏、公益社団法人セーブ・ザ・チャイルド・ジャパン パートナー・リレーションズ部長・兵頭康生氏、特定非営利活動法人ウオータリーエイドジャパン事務局長・高橋郁氏がそれぞれ講演し、所属企業、団体のSDGsの活動を紹介した。

## GHQの影響を考察

### 極東軍事裁判研究の公開講演会

法学部法比較法研究センターが主催する「極東軍事裁判研究の公開講演会」が、昨年11月2日にオンラインで開催された。

講演では、麗澤大学大学院客員教授の高橋史朗氏が、戦後日本と日本人の精神に多大な影響を与えた占領軍によるWGIP（戦争についての罪悪感）を取り戻すための努力について、本人の道徳を取り戻すための努力について、WGIPと歴史を振り返り、WGIPの公開講演会を開催された。

感を得た。日本人に種々付けたための宣伝計画に焦点をあて、当時GHQが日本人の国民性をどのように捉え、対日占領政策に反映させていたのかを、さまざまな文獻から解き明かした。

本プロジェクトは国士館創立100周年記念事業の一つとして平成23年に発足した。以後、研究会やシンポジウムの開催、書籍の刊行を通して東京裁判研究を続けていく。

## 吉田松陰の思想 4分野から究明

### 学部横断的シンポジウム

国士館大学吉田松陰研究会主催のシンポジウム「吉田松陰」が、昨年11月3日、世田谷キャンパス34号館B203教室で開催され、学生・教職員約20人が参加した。

本学の教員4人が登壇し、明治維新の思想的原動力となる尊王攘夷論を主軸とし、本学の建学の精神にも影響を与えた吉田松陰の思想について、日本文学、藤田政経学、政治学、宗教学、歴史学、法学部准教授、中国哲学、松野敏之が講演した。



講演する勝田教授

吉田松陰研究会は、国士館創立100周年プロジェクトを契機に発足し、学部横断的に松陰研究を続けている。

文学部の齋野正明教授が「吉田松陰の思想」をテーマに講演し、その中で「吉田松陰の思想は、日本史学を専門とする勝田教授、複数の書籍から浮かび上がる近代日本における松陰像を紹介。その上で、それら松陰像が時代状況や論者の主観、時には国策によって形作られてきた」と述べ、諸学問による総合的な実証研究に支えられた本来の松陰像の構築を望んだ。

**卒業生の皆様へ**

いつも国士館大学新聞をご愛読いただき、ありがとうございます。

住所変更や発送停止をご希望の場合は、国士館大学同窓会ホームページからお手続きが可能です。

同窓会事務局 ☎ 03-3413-7303

## 世田谷プラットフォーム 「震度7」防災研修



防災研修を進行する中林准教授（右）

令和3年度世田谷プラットフォームの活動として、昨年10月14日に世田谷キャンパスのメソッドセンターホール第1会議室で防災研修が実施され、協定校（国士館・駒澤・昭和女子・成城・東京都立・東京農業）職員と世田谷区防災担当者33人が参加した。

研修では、本学防災・救済救助総合研究所の中林啓准教授がファシリテーターを務め、都内最大震度7の地震を想定し、

初動対応や地元との連携について、大学ごとに対応計画を立てる多角的な視点を共有し、防災マップの活用や、また、同25日にはFDシンポジウムがオンラインで開催され、協定大学の教職員・大学院生87人が参加した。

今回はコロナ禍における大学教育の質保証に焦点を当て、各大学6人の教員が事例報告を行い、課題解決への取り組みを共有した。

世田谷プラットフォームは世田谷区内6大学と世田谷区、区内産業界の3者が連携し、区の発展への寄与を目的に平成29年に発足。大学間連携で学生の成長支援を強化するため、定期的に各種イベントを行っている。

## マスコミを追う

静岡県静岡市の浜地区で歴史的景観の一部となっている石垣の耐震補強活動にあたり、理学部の橋本隆雄教授が地区長に対して行った中間報告会について掲載（日刊静岡新聞1月4日）

●裁判員裁判に神戸5人 救済救助総合研究所の山崎教授がゲスト出演（文化放送12月5日・12月19日・26日）

●和歌山県で「きんぎょ」の復活を祈る（NHK12月26日）

●「コロナ禍」で救済救助総合研究所の山崎教授がゲスト出演（文化放送12月5日・12月19日・26日）

●「コロナ禍」で救済救助総合研究所の山崎教授がゲスト出演（文化放送12月5日・12月19日・26日）

## 卒業生

●静岡興浜浜市レストラで、製造部主任として活躍する卒業生 杉本大樹さん（平成23年体育学部卒）のインタビュー記事が掲載（あなただけの新聞10月26日）

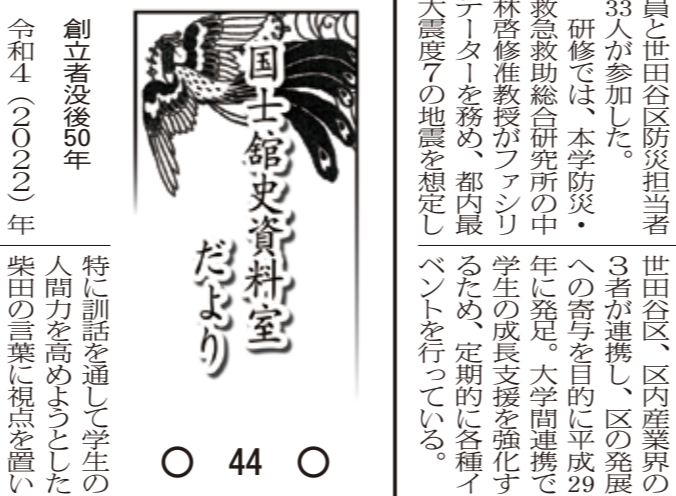
## リノベーション住宅はCO2排出量76%削減 朝吹研究室 産学連携で実証

理工学部建築学系朝吹香葉子研究室は、リノベーション住宅が脱炭素社会にどの程度貢献できるかを検証し、二酸化炭素（CO2）の排出量を最大76%、廃棄物の排出量を最大96%削減できたとの結果を昨年11月30日、3者共同で発表した。

「北志野台プロジェクト」と「百蔵公園プロジェクト」として、既存住宅を対象に既存物件を高規格で新築した場合と比較したところ、大幅にCO2の削減効果に差が生じる結果となった。

朝吹研究室では、建築における資源循環や建物の改修・解体に伴う環境負荷などの調査・評価を通じて脱炭素社会の実現に寄与する研究を行っている。今回の研究結果について朝吹准教授は「リノベーションの個性によりCO2削減効果に差が生じる結果となった」と述べた。

## 辰野教授がファシリテーター 日野・多摩・稲城3市共催 「再犯防止シンポジウム」



辰野教授

自治体の関わり方や関係団体との連携について各パネリストに意見を求め、最後に「再犯防止活動には課題も多いが、地域に根づく行政の役割がそこにある。活動を継続的に進めることで市民的理解を得る必要がある。本シンポジウムがその助けとなれば幸いです」と述べた。

シンポジウムは「誰もが安心して暮らすことが出来るまち」を再犯防止のための支援のあり方をテーマに日野、多摩、稲城による3市合同主催のイベントとして開催された。

## 田原教授に「ヴィケラス賞」 日本人初の受賞

今回の受賞は、オリビウムおよびオリビウム・ヒューマン・デザイン・センターの歴史に関する研究と普及・教育活動に長年従事し、国際ビジュアル・デザイン・センターの活動を通して、高校生・大学生を中心としたオリビウム教育に尽力したことが、日本オリビウム・センターの設立および企業運営に貢献したことが高く評価された。

田原教授は現在、国際ビジュアル・デザイン・センター委員副会長、国際フェスティバル・デザイン・センター委員、国際フェスティバル・デザイン・センター理事などの要職を務めている。

この研究では今後CO2削減や廃棄物削減量の定量化に取り組む、新たな機能・価値を付加したリノベーションによる環境への影響を検証していく。

朝吹研究室では、建築における資源循環や建物の改修・解体に伴う環境負荷などの調査・評価を通じて脱炭素社会の実現に寄与する研究を行っている。今回の研究結果について朝吹准教授は「リノベーションの個性によりCO2削減効果に差が生じる結果となった」と述べた。

## 田原教授に「ヴィケラス賞」 日本人初の受賞

このたびは国際オリビウム協会（ISO）の歴史に、長年にわたって「ヴィケラス賞」が贈られた。日本の受賞は初めて。

同賞は国際オリビウム・センターの設立および企業運営に貢献したことが高く評価された。

田原教授は現在、国際ビジュアル・デザイン・センター委員副会長、国際フェスティバル・デザイン・センター委員、国際フェスティバル・デザイン・センター理事などの要職を務めている。

## 辰野教授がファシリテーター 日野・多摩・稲城3市共催 「再犯防止シンポジウム」

自治体の関わり方や関係団体との連携について各パネリストに意見を求め、最後に「再犯防止活動には課題も多いが、地域に根づく行政の役割がそこにある。活動を継続的に進めることで市民的理解を得る必要がある。本シンポジウムがその助けとなれば幸いです」と述べた。

シンポジウムは「誰もが安心して暮らすことが出来るまち」を再犯防止のための支援のあり方をテーマに日野、多摩、稲城による3市合同主催のイベントとして開催された。

## 柴田徳次郎 論語について学生に訓話する

令和4（2022）年1月26日は、創立者柴田徳次郎の五回忌にあたる。これを記念し、昨年秋、世田谷キャンパス国士館大講堂において創立者の遺訓をテーマとした企画展示「柴田徳次郎が語る」を開催した。

特に訓話を通して学生の人間力を高めようとした柴田の言葉に感銘を受けた。今回は教育に心血を注いだその生涯とともに、創立者の遺した「言葉」を紹介する。

柴田徳次郎は、明治23（1890）年12月20日、福岡県に生まれ、15歳で上京、若年の末早稲田大学大講堂を卒業。在学中、同郷の名士である山崎・野田・野田・後学生に式典参加・校門警備などの支援者となる。期々の知遇を得る。幼少期より困窮する人々を助けたという志を抱いた。

柴田は、大正6（1917）年11月、次世代を育てる青年層の教育に着目し、同志と共に国士館を創立した。伝統文化に基づいた「真の知識人」の育成を目指した国士館の教育趣旨は、浜沢栄一ら名士の支援を得る。国士館は、戦禍により校舎を焼失する苦難を乗り越え、昭和28（1953）年に国士館短期大学、同33年に国士館大学を創設して、大学院・大学・高等学校・中学校を擁する総合学園へと発展を遂げる。柴田は、昭和48年1月26日の永眠まで本学発展に尽力、その中心にあった。

◆資料提供のお願い◆  
国士館に関する資料や情報の提供をお願いします。講義ノートや長訓話、や一人一人の卒業面接を自ら行うなど、独自の教育を実施し、資料をお寄せ下さい。

【連絡先】  
世田谷キャンパス 柴田会館内 国士館史資料室 TEL 03-3413-2691

国士館大学

キラリ輝く、国士館大生をご紹介します

**トキメキ**

KOKUSHI

Interview Vol.01 白井 大心  
Interview Vol.02 清水 太一  
Interview Vol.03 宇田 真由  
Interview Vol.04 多田 真由  
Interview Vol.05 前川 智香  
Interview Vol.06 前川 智香  
Interview Vol.07 伊藤 千尋  
Interview Vol.08 藤田 千尋